

■いわて文化ノート

「相撲巡業の盛衰 ～仙北・田頭・太田の集団～」

舟山 晋 (主任専門学芸調査員)

1 中相撲の隆盛

昭和20年代まで、県内各地には現在のプロ力士が行う大相撲とは別に、各地方を巡業してまわる相撲集団が存在しました。彼らは普段、農業や商業に従事していますが、夏から秋に各地の奉納相撲を転戦し、賞金や賞品を獲得していました。これを中相撲とか草相撲・花相撲と呼びます。

昭和初期においては、盛岡市の仙北、太田村(現、盛岡市太田)、田頭村(現、八幡平市西根町田頭)の相撲集団が有名でした。集団を統率した親方は、力士の世話役であり経済的な支援者でした。所属する力士はそれぞれ四股名を持ち、中相撲の開催地域では大相撲と同様、本名以上に好角家に認知されていました。

2 仙北の相撲集団

盛岡市の仙北では、藤原仁左衛門が商業の傍ら、手柄山親方として力士の育成に力を入れました。「手柄」の四股名をつけた力士達は、同時に盛岡市消防第一組(現、盛岡市消防第一分団)の一員として、藤原仁左衛門の下で活動しています。相撲集団の構成員が消防団に關係する例は、浄法寺町や久慈市、矢巾町などにも見られます。

写真Aは昭和15年(推定)の親方42の歳祝いに参集した力士の面々です。

後列左から手柄若(昆善治郎)、三人目が手柄石(吉田克己)、前列左から手柄嶽(高

橋市兵衛)、三人目が親方(藤原仁左衛門)、右端が手柄里(吉田七五郎)です。

彼らは昭和3年から4度、青森・秋田・岩手の三県相撲大会を柗形(現、仙北三丁目の第一分団消防署)で開催し、その様子を当時の岩手日報紙が詳しく伝えてい

ます。大会とはいえ、同じ力士が何度も土俵に上がり、観客も飛び入りで参加できる力自慢のイベントでした。運営方法は、多くの勧進(寄付)を集める中相撲の形です。元々中相撲は、江戸相撲の地方巡業の形を継承していると考えられ、力士を多く抱える集団が運営した相撲興行です。内容も飛びつき五人抜き・三人抜き、対戦カードを自由に決めのお好み勝負など多彩です。観客は木戸銭を払い、力士は賞金や賞品を手に入れました。なかでも最強力士を決める5人抜きは、タンスや米俵、高額な賞金を競うメインイベントでした。

「石鳥谷会場では懸賞金付き・七人抜き式拾円・五人抜き十円・三人抜き五円」と昭和3年11月4日付岩手日報紙に、三県相撲大会の予告記事があります。また観客がその場で力士へ出す個人的な賞金(お花)もあり、当時の中相撲は、新聞社も主催に加わる大衆娯楽の王様でした。

また、集客が容易な都市部の仙北相撲集団は、消防団のつながりもあり、多数の力士を差配できる興行の中心でした。

その中でも昭和5年に県下相撲選手権で

優勝した手柄若(昆善治郎)と、昭和16年に明治神宮大会の産業別団体戦で優勝した手柄里(吉田七五郎)は看板力士です。明治42年生まれの二人は、昭和20年代まで、各地の奉納相撲に参加しています。

※調査協力：菅原岩雄・藤原洋司・高橋満・藤島雪雄・熊谷英雄・高橋清(敬称略)

3 田頭の相撲集団

仙北で開催された三県相撲大会には田頭の力士も参加しました。桂山と鬚姿の親方で有名な根別川です。根別川(遠藤甚蔵)は農業の傍ら相撲に力を入れ、小柄ながら多彩な技を持つ強豪力士でした。私財を投じて力士の生活を支え、技量向上のため、仙北の手柄若を一日三円のコーチ料で招聘しています。昭和6年以降は桂山(遠藤午吉)が中心となり巡業を続けます。仙北同様、県内に多くのファンを持ち、昭和4年の岩手日報紙の文化投票娯楽の部で、田頭相撲倶楽部は三位に入選しました。

写真Bはこの入賞記念の絵葉書です。仙北での三県相撲大会にそなえ練習に励む田頭の面々が、俵五俵の簡便的な角土俵の上に並んでいます。後列中央が当時の田頭村長の佐々木善八、右隣が最後の田頭村長の三田村富治、看板力士は前列右端の桂山と、左隣の根別川(鬚姿)です。昭和5年の三県相撲大会のお好み勝負で、根



写真A 大清水多賀(仙北)



写真B 八幡平市西根町(田頭)



写真C 桂山(田頭)

別川が秋田の藤見川に勝ち、同年の岩手県相撲大会にも二人は参加しています。

アマチュアでは珍しい鬘姿の根別川は、取り口にも特徴があったため、昭和20年代まで、桂山とともに県北部地域で活躍ぶりが喧伝されました。

写真Cは昭和初期の化粧まわし姿の桂山です。同じ鯨に星のまわしは、写真D(昭和10年)太田村でも見ることができます。

※調査協力：遠藤勇・遠藤甚栄・小笠原高光(敬称略)

#### 4 巡業と化粧まわし

仙北の相撲集団は、北は二戸市・浄法寺町、南は紫波郡(矢巾・古館)、東西に釜石市、八幡平市(旧西根町)と広い範囲を、8月から10月まで転戦します。これに太田や田頭、紫波の集団が加わりました。この間、家業や仕事を休み家を空けたため、家族の相撲への反発もあったようです。

写真Dは昭和10年、盛岡市の太田橋落成記念相撲の時のものです(当時は岩手郡太田村)。立ち姿の左から、太田の熊谷萬九郎行司、一人おいて写真Cの化粧まわしをつけた太田の隼(高橋与一郎)、一人おいて滝沢の嶽ノ越(武田)・荒岩(樋下松太郎)、仙北の手柄里、三人おいて五所桜(樋下二郎)、萬九郎が支援した元大相撲力士の陣幕(田代吉郎次老人)、躑躅姿は左から、紫波(矢巾)の早波(吉田善次郎)、太田の上ノ島(熊谷繁蔵)の面々です。

写真Eは戦後の昭和21年10月、釜石市の尾崎神社の奉納相撲です。仙北と太田の力士が目立ちます。後列左から二人目が手柄里、一人おいて手柄川(田頭富蔵)、躑躅姿の左から二人目が太田の五所ノ若(樋下正)です。写真Cの桂山の化粧まわしを、今度は前列左から三人目(高橋正栄)が着用しています。また、このときの手柄川の化粧まわしは写真Fです。このように、優勝力士などがつけた化粧まわしは、



写真D 太田橋開通記念  
(仙北・太田・紫波・田頭)



写真E 釜石尾崎神社(仙北・太田)



写真F 手柄川化粧まわし(仙北)



写真G 浄法寺町草相撲(仙北・太田・浄法寺)

貸し借りや譲り受けがあったようです。

写真Gは昭和26年8月の浄法寺での草相撲です。後列左から浄法寺町の消防団長で相撲の勧進元でもある杉沢岩松、手柄里、国鉄の関佐助、元大相撲力士の沼倉久雄、手柄若、二代目手柄浪(渡川正・後に国体個人2位)、前列左から太田の呼出・樋下富吉、一人おいて太田の五所ノ若(樋下正)、太田の熊谷登行司、浄法寺の馬場幸一(元岩手県相撲連盟理事長)です。仙北・太田・浄法寺に国鉄の力士も加わりました。

※調査協力：佐々木正雄・佐々木正直・田頭勝己・館山徹・堀口貞佑・馬場滝子(敬称略)

#### 5 中相撲の衰退

明治生まれの力士が引退し、娯楽が多様化する昭和40年代に入ると、中相撲はその存在意義を失っていきます。最大の要因は、岩手国体に向けたアマチュア相撲の組織化です。加えて相撲集団が持つ、巡業中心の無頼な生活臭や興行性が、高度経済成長期の生活様式に対応できなくなりました。アウトサイダーになった彼らは、奉納相撲や後継者が減少する中で活躍の場を失います。特に都市化が進む仙北では継続が苦しくなりました。

現在、奉納相撲は、参加する力士や観衆の不足にあえぎながらも、農村部では神社の夜相撲として残っています。その運営形態や番付に、かつての中相撲の匂いを感じることができます。

なかでも浄法寺町神明社や八幡平市(旧西根町田頭)の田頭稻荷神社の奉納相撲は、小・中学生から、高校生や一般の選手に他県からの招待選手も加わり、五人抜きやお好み勝負など、中相撲の残り香をかもし出す貴重なものです。

※文中の敬称は略させていただきました。

※写真協力：田村勝正・吉塚スミ子・遠藤勇・佐々木正雄・熊谷ハナ(敬称略)